

嶋田智明(編)

「障害別・ケースで学ぶ理学療法臨床思考 PBL で考え進める」

武政誠一

(神戸大学医学部保健学科)

理学療法士の使命は、理学療法を必要とするクライアントが抱える問題を科学的に解決することにある。そのためには、問題を明確化し、解決策を決定する理論的な思考過程である clinical reasoning(クリニカルリーズニング：臨床推論)能力が必要である。この能力を向上させる1つの方法として問題基盤型学習(problem based learning：PBL)がある。本書は、PBLという自己啓発学習プログラムを導入し、理学療法士の臨床的情報統合・解釈能力や問題解決能力を高めるために出版された、「ケースで学ぶ理学療法臨床思考」(2006年1月)の姉妹編である。本書の新たな特徴は、運動機能障害の理論的根拠を運動学(病態運動学)に求め、それを基に理学療法評価・治療介入への科学的プロセスの方向づけをしている点である。

本書では障害別に痛み、可動域制限、筋力低下、バランス障害、協調障害、表在・深部感覚障害、歩行障害など25症例が具体的な症例として網羅されている。さらに執筆者全員が理学療法士であり、同じ観点・視点で読むことができる。そのため、学生にとっては、評価実習や臨床実習前に読んでおけば、症例の評価・治療に役立つ。また新人理学療法士にとっては、問題

解決への目標(理学療法診断)を立て、それを検証する技術、さらにその能力を高める指針ともなる。

本書の構成は、PBL1とPBL2から成る。PBL1では初期情報から仮説を経て、仮説証明を行うために必要な初期情報(処方箋、現病歴、観察など)、Question1(症例の持つ障害を引き起こしている根本的な問題の仮説、仮説を証明するための評価項目とその妥当性について説明)、思考のガイドライン(初期情報→初期仮説→追加情報の収集について、いかに考え進めていくかの道筋を教示)などが解説してある。さらに、初期情報から仮説を立てるための基礎知識として、運動機能障害、障害、症状における理学療法実施の根拠となる病態生理、病態運動学および具体的な考え方が提示してある。

PBL2の追加情報から問題点を抽出し、治療プログラムを立てる段階では、追加情報、Question2(理学療法的に解決すべき問題点、治療目標、治療プラン、リスクを列挙し説明)、思考のガイドライン、仮説の修正、標的の捉え方、目標設定の考え方、治療プラン立案のためのEBM、アウトカムなどについて解説されている。

このように本書はPBLプロセスを基に記述されているため、学生ばかりでなく新人理学療法士にとって幅広く活用できる内容を包含した有用な書といえる。

●B5判 506頁・2色刷

定価 6,500円(本体 6,190円+税 5%)

2007年 文光堂・刊